

## 食健康栄養学科における管理栄養士国家試験対策への 取り組みとその効果の検証

松本富美子・寺嶋 昌代

### はじめに

管理栄養士国家試験は、管理栄養士として必要な基本的知識および技能についての確に評価するものとして、厚生労働省により管理栄養士国家試験出題基準（ガイドライン）が定められ実施されている<sup>1)</sup>。このガイドラインは、急速な少子高齢化の進展や疾病構造の変化、栄養関連の学術の進歩、保健・医療・福祉・教育などに関連した法・制度の改定に速やかに対応するため概ね4年に一度改定が行われている。現行のガイドラインは、平成24年3月の第26回管理栄養士国家試験から適用されているものである。出題される分野は9分野であり、このうち「社会・環境と健康（社会）」「人体の構造と機能及び疾病の成り立ち（人体）」「食べ物と健康（食べ物）」の3分野では、栄養管理を实践する上での基本となる人間の健康（疾病）と社会・環境、食べ物の関係についての問題が出題され、他の6分野「基礎栄養学（基礎栄養）」「応用栄養学（応用栄養）」「栄養教育論（栄養教育）」「臨床栄養学（臨床栄養）」「公衆栄養学（公衆栄養）」「給食経営管理論（給食経営）」では、管理栄養士が果たすべき多様な専門領域のいずれにおいても重要な基盤となる栄養の意義や個人、集団、地域を対象とした栄養管理に関する問題が出題される。そして、これらに加えて管理栄養士に求められる思考・判断力並びにそれに基づく問題解決能力を評価するための「応用力試験」も出題される<sup>2)</sup>。出題形式は正しいもの（5つの選択肢から1つないし2つの正解肢）を問う方式を原則とし、全200題のうち正答率が6割以上で合格となる。

管理栄養士には、保健所、官公庁、学校、事業所、福祉施設、病院など、多岐にわたり活躍の場があるが、平成14年4月に「栄養士法の一部を改正する法律」が施行され、管理栄養士は「疾病に対する療養のために必要な栄養指導、個人の身体の状態、栄養状態並びに特定多数人に対して継続的に食事を提供する施設における利用者の身体の状態、栄養状態、利用の状況等に応じた特別の配慮を必要とする給食管理及びこれらの施設に対する栄養改善上必要な指導等を行うもの」と定められた<sup>3)</sup>。これにより、管理栄養士は今後ますます人々の健康維持増進に対し、食という切り口から積極的にアプローチする

役割が求められるようになった。このことは、管理栄養士の専門性を高めて地位を上げることに寄与したのと同時に、国家試験の内容にも変化を与え、現在では総合医療の現場で活躍できるための基礎的な知識や技能が評価されるような問題が多く出題されるようになった。

食健康栄養学科では、このような社会のニーズに応えるべく、医学・薬学の知識を持った医療に関わる管理栄養士の育成を目指し、未来を見据えた病気の予防と治療に関する教育プログラムの充実をすすめている。平成26年4月には医療系科目を充実させ臨床検査技師養成課程もプラスした新しい管理栄養学科の設置が予定されている。本学科は平成20年4月、健康福祉学部に食健康学科として設置され、平成24年3月に第一期生を輩出した。第一期生の管理栄養士国家試験（第26回国家試験）の合格率は54.2%であった。既卒者を含めた場合の合格率（全国平均）は毎年40%前後で推移しており、第一期生の合格率は概ね全国平均といえる。管理栄養士養成校のミッションの一つに、全国平均を超える高い合格率の維持があげられるが、開学当初では国家試験対策に関わる経験が豊富でないことから、多くの場合で合格率は決して高くないことも事実である。本学科では初年度に経験したことを第二期生に反映して国家試験対策を充実させ、第二期生の合格率を75.0%と大幅にあげることに成功した。そこで今年度は過去2年の経験を生かして、さらなる合格率アップをはかることを目標とし、学習支援プログラムを起案、吟味して実践した。本稿では、今年度に学科で実施した4年生対象学習支援プログラムについて述べ、次にその効果について評価、検討した。また、学習支援の効果をより高める目的で学生に対してアンケートを実施して面談等における指導の参考にするとともに、次年度以降の国家試験対策の参考資料とすることを目指した。

### 管理栄養士国家試験にむけた4年生対象学習支援 の内容と効果の評価方法

#### （1）国家試験対策の内容

管理栄養士国家試験合格にむけた食健康栄養学科の試みとして、具体的には以下の学習支援を実施した。

① 管理栄養士国家試験全分野の再確認・再理解

4年次履修科目である管理栄養課題研究Ⅰ（第1学期：1単位）、管理栄養課題研究Ⅱ（第2学期：1単位）を軸に、講義型学習支援に多くのコマを割り、全分野の再確認・再理解を行った。第1学期では週9コマを使い、半期で全ての分野を一通り学習できるよう授業計画を立てた（表1-a）。模擬試験（模試）を月曜日と定め、月曜日以外で平均2コマ/日、学習支援を実施した。第2学期は、学習支援に週15コマを使った。第1学期と同様に月曜日は模試の日とし、平均して3～4コマ/日を支援にあてた（表1-b）。具体的な授業内容であるが、第1学期は市販の管理栄養士問題解説集『クエスチョン・バンク 2013』（医療情報科学研究所）を用い、記載されている全問題について周辺知識を含めて解説を行うと同時に小テストを実施して、内容理解と知識の定着をはかった。第1学期の学習をもとに、第2学期では問題演習と解説を中心に知り知識を深めるとともに、一問一答だけではなく周辺知識をつなげて理解し覚えられるよう学習を促した。

② 苦手分野強化プログラムの実施

第1学期は「人体」の強化を実施した。昨年度国家試験を受験した学生の模試の結果について分析したところ、国家試験合格者はすべて「人体」で5割をとっており、それに満たないものは不合格であった。最初に「人体」を強化した理由は、「人体」が国家試験合格の第一の要の分野であることが明確となったからである。強化方法としてまず、週に9コマの学習支援の中で、「人体」の配分を2コマあてて時間数を多くし、さらに「生化学クラブ」を立ち上げ、希望者に対して週1コマプラスの「人体」の学習支援を行った。つまり、週3コマを「人体」にあて、国家試験対策を行った。第2学期は「食べ物」の強化プログラムを立ち上げた。これは、第2学期初めに「食べ物」分野の模試得点率が6割に到達した者が全体の2割しかいなかったためである。暗記科目であるからスタートは遅めでもよいという認識では後手になると判断した。この分野は出題範囲が広いので1人の教員では対応しきれず、第1学期では必ずしも内容を熟知した教員だけで授業を担当していたわけではないという現状があった。このような状況の反省から、第2学期で

表1 平成25年度4年生対象国家試験に向けた学習支援週間スケジュール

(a) 第1学期

	月	火	水	木	金
1	模擬試験	食べ物	人体	基礎栄養(隔週) 給食経営(隔週)	栄養教育(隔週) 臨床栄養(隔週)
2		テスト直し 調べ学習	テスト直し 調べ学習	テスト直し 調べ学習	テスト直し 調べ学習
3		管理栄養課題 研究Ⅰ	テスト直し 調べ学習	テスト直し 調べ学習	テスト直し 調べ学習
4		管理栄養課題 研究Ⅰ(補講)	生化学クラブ	人体 (医学・病理)	社会

(b) 第2学期

	月	火	水	木	金
1	模擬試験	応用栄養	人体	社会	臨床栄養
2		食べ物 (QB穴埋め問題)	給食経営(隔週) 食べ物(隔週)	基礎栄養(隔週) 栄養教育(隔週)	テスト直し 調べ学習
3		管理栄養課題 研究Ⅱ	食べ物	テスト直し 調べ学習	テスト直し 調べ学習
4		管理栄養課題 研究Ⅱ(補講)	解剖クラブ	人体 (医学・病理)	食べ物
5		テスト直し 調べ学習	テスト直し 調べ学習	公衆栄養	食べ物

は「食べ物」を5分野に分割し、より専門に近い教員が責任を持って教えられるように計画を修正した。さらに、学生が使用している教材である『クエスチョン・バンク2013』に記載されている基本項目を教員が抜き出して穴埋め問題集を作成し、それを全て解答できるように学生に課した。学習支援の授業中で「食べ物」には4.5コマ/週を費やし、講義と演習問題・解説を丁寧に行い内容の理解と知識の定着を目指した。

#### ③ 管理栄養士国家試験対策室の開室

大学内において、国家試験対策室（以下、対策室）を定めて授業期間内に開室した。月曜日から金曜日の1～5時限（水曜日4限は除く）の各時限に担当の教員が輪番で常駐する。対策室では、国家試験に出題された問題文中に含まれる重要語句の暗記とテストによる確認を行い、基礎学力の充実を図ることを目的として運用する。学生は授業の空き時間など、いつでも対策室を利用することができるのと同時に、授業とは異なり個別対話型の指導となるため、疑問点を教員に聞きやすい環境となっていることが特徴である。また教員の在室担当時間があらかじめ示されているため、国家試験対策に限らず通常の授業などでわからない点も聞きに来やすいという利点がある。対策室は通常授業期間に開室しているが、4年生向けには授業期間終了後も延長し、2月末まで開室した。

#### ④ 国家試験過去問（7年分）の徹底暗記

平成26年1月からは、第21回国家試験から第27回国家試験の問題を用いて、各回3時間を使い毎週試験を行った。試験終了後に、間違えた問題（×）、合っていたが完全な理解ではなかった（△）、完全な理解に基づいて正解した（○）の3種類で一覧表にマークをつけ、

表2 平成25年度4年生対象東海アカデミーの時間割

##### (a) 東海アカデミー（夏講座）

日程	1・2限:講義、3・4限:小テストおよび調べ学習
8/1(木)	人体(苦手国家試験問題の再復習)
8/2(金)	人体(脂質・糖質)
8/5(月)	人体(神経系)
8/6(火)	人体(生化学)
8/7(水)	人体(病理)
8/8(木)	試験(8/1～8/7の全範囲)

##### (b) 東海アカデミー（冬講座）

日程	1限	2限	3限	4限
12/24(火)			公衆栄養	応用栄養
12/25(水)	食べ物	基礎栄養	社会	栄養教育
12/26(木)	人体(病理)	人体	臨床栄養	給食経営

全ての問題が○となるまで何度でも解き直すよう指導した。過去問の徹底暗記に加え、この一覧表は自分の苦手問題を洗い出すために有用であると考え、国家試験直前の勉強に役立つことも期待し、学生には目的意識をもって取り組むよう指導した。

#### ⑤ 東海アカデミーの実施

これまでの知識を総括することを目的として、長期休暇ごとに集中講義を実施した（表2-a,b）。この集中講義を東海アカデミーと名づけ、知識の整理を行うことに加え国家試験を受験する雰囲気作りができるよう配慮した。8月1日～6日（人体強化）、12月24日～26日（全範囲の国家試験予想問題）の日程で実施した。（1～3年生には別に、8月1日～6日、12月24日～26日、2月3日～7日の日程で東海アカデミーを実施した。）

#### ⑥ 外部予備校講師による集中講義の実施

9月17日から3日間、基礎力の完成及び充実を目標に外部予備校講師を招いて「人体」「食べ物」「基礎栄養」「臨床栄養」について集中講義を開講した。さらに今後、3月2日から2日間、国家試験直前講習を開講する予定である。

#### ⑦ 模試試験の実施と成績フィードバックおよび面談

4月からほぼ1カ月に1～2度のペースで模擬試験（外部業者主催模擬試験、学科内で作成した学内模擬試験）を計13回行った。模試ごとに個人の科目ごとの得点率や総合得点の学科内順位を示し、互いの競争心に訴えるようにした。また、成績下位者には面談を計画し、管理栄養課題研究科目担当者および指導教員その他数名で面談（一人当たり20～30分）を行い、激励を行った。面談は多い学生で数回に及んだ。

#### ⑧ アンケートの実施

学習支援が学生側にどのように受け止められているか知ることを目的に、国家試験を受験する学生にアンケートをとった。内容は、学習支援の授業評価、国家試験に対する意識調査、後輩へのアドバイスなどである。回答は記述式を除いて、そう思う、大体そう思う、どちらでもない、あまりそう思わない、全くそう思わない、の5段階で集計した。アンケートを実施するにあたっては、調査目的を文書にて伝えた。また、データは目的以外では用いないこと、無記名で行うため個人に関する情報が特定されないこと、参加は任意であることを口頭で伝えて実施した。有効回答は95%であった。

### (2) 国家試験にむけた学習支援効果の評価

各授業における学習効果の確認は担当教員が準備する小テストで行い、授業へのフィードバックに努めた。加

えて、知識の定着および国家試験問題の正解を導き出す力をはかるために模試を行った。今年度は合計 13 回実施した。内訳は、外部業者が主催する模試 7 回（日程：5/6、6/3、10/14、10/31、11/11、1/8、1/20）、学内模試 6 回（日程：4/8、7/1、8/9、9/30、11/25、2/10）である。データの集計・分析は表計算ソフト Excel を用いて行い、学習支援前と後の模試平均点の差を調べるために、t 検定 (paired t test) を行った。データの分布はヒストグラムを描くことにより確認し、分析に用いた。

## 結果および考察

### (1) 管理栄養士国家試験全分野内容の再確認・再理解

本学ではカリキュラム上、国家試験の合格に必要な知識の習得は 1～3 年次の 3 年間で終了することになっている<sup>4)</sup>。しかしながら 4/8 に実施した模試（第 27 回国家試験を使用）の総合平均得点率（%）は 50.0 (SD = 11.4) であった。定期試験の時には覚えられていたことも時間が経つと記憶が薄れてしまうようで、勉強したことを自分の知識として記憶に残すことの難しさがうかがえる。図 1 の点線で示したグラフは、4/8 の模試と 5/6 に実施した外部模試の平均を各分野ごとに示したものである。これは学習支援前の得点率としてみなすことができるが、全分野にわたり国家試験合格ライン（60%）に届いていない。また得意分野がないであろうことが推測された。特に「人体」「食べ物」「応用栄養」「公衆栄養」など、暗記が多い分野が苦手なようである。一方、図中の実線は、11/11、1/8、1/20 に実施した 3 回の外部模試の平均を学習支援後として示したものである。学習支援を実施したことによって全体的に得点率が上がったため、輪が外側に広がったことがわかる。

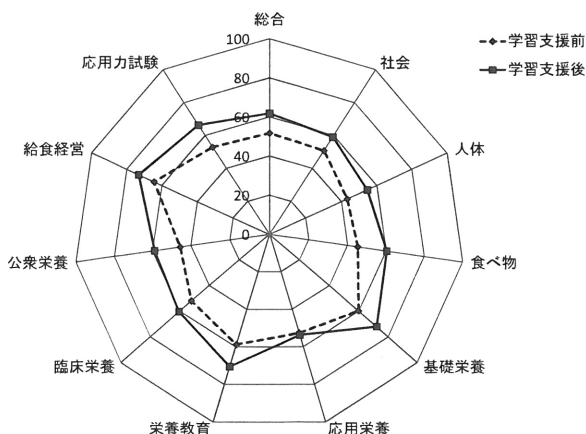


図 1 学習支援前後の各科目における模試得点率

学習支援をすすめていく中で、これまでの学習の記憶について学生に尋ねることがたびたびあるが、どの科目

で、あるいはどの教員に教えられたかの記憶が薄く答えられない場面に出くわすことがある。テスト効果 (testing effect) に関する論文では、テストは学習者の理解度をチェックするためだけでなく、学習材料を長期的知識として定着させるための重要なツールであることが指摘されている<sup>5)</sup>。あるテキストの内容を一定時間かけて暗記させた集団を 2 群に分け、1 群にはさらに暗記を続けさせ、もう 1 群にはテストを実施させるという実験を行った場合、暗記時間が多い群より、テストをした群でその後のテストの成績が良いというデータが示されている。さらにこのテスト効果は、より持続的であるという。また、長期間の反復学習が問題解決能力や判断力などを改善することは、すでに多くの研究により指摘されていることである<sup>6) 7)</sup>。本学科では今年度より、毎回の学習支援において講義内容に関連した小テストを実施していただくよう全教員に呼びかけ、知識の確認と定着に努めている。

### (2) 苦手分野強化プログラムの実施

学習支援をすすめる前に実施した模試結果からは、全範囲について補強が必要であることが示された。管理栄養士国家試験には、他の国家試験でみられるような分野ごとの足切りがないため、一見して苦手分野が存在していても他の分野でカバーすれば問題ないように思える。しかしながら、国家試験では 1 点の差が合否を分けることが経験上明らかであることから、苦手分野の克服は合格への必須条件といえる。

第 1 学期の強化分野である「人体」は、本学の学生が低学年次より苦手意識を持っている分野である。だが前述のように、「人体」は国家試験合格のカギを握る分野である。また管理栄養士が総合医療の現場で活躍できる人材として社会から期待されるようになったことから、その基礎となる「人体」は極めて重要で、早めに苦手意識を克服しなければならない内容である。学科では「人体を制するものは国試を制す」を合言葉に、強化プログラムをすすめた。「人体」における第 1 学期の達成目標は、模試において常に 5 割以上得点する実力をつけること、第 2 学期の目標は、これを維持・向上させることとした。

第 2 学期では「人体」強化体制を維持しつつ、加えて「食べ物」の強化に取りかかった。「人体」週 3 コマはそのままで、「食べ物」に週 4.5 コマをあてた。さらに過去 5 年間に出题された問題の項目（ガイドラインの中項目に相当）を精査し、頻出項目の学習がより多くできるように学習支援の授業計画をたて、効率的に国家試験の



得点に結びつくよう工夫した。基本事項をまとめて作成した穴埋め問題集は、はじめ学生には不評であった。その理由は、文章で覚えなくて単語や場所、順番で覚えてしまう、量が多くてこんなに覚えられないなどである。しかし開始後2ヶ月を越えた中盤以降には、勉強が楽しいと発言する学生が増えてきた。なぜ楽しいかを聞いたところ、穴埋め問題集で覚えたところが模試に出たので、1問多く正解できたからということであった。勉強について面白いと感じようになったことに関して考えてみると、上菌らの報告にあるように、学生は「言われてやる」のは嫌いで「自分の力でできる」「自分で考える」のが好きようだ<sup>8)</sup>。速水らは学習動機を「承認志向動機」「現実志向動機」「理解志向動機」の3種類に分類し、成績との関連を調べている<sup>9)</sup>。嫌いだった穴埋め問題集の試験（暗記）が好きになった学生は、地道な努力が模試での1点に結び付いたということが「理解志向動機」の一因となって、語句の暗記という単調な暗記作業に対しても自主性が生まれたのであろう。また「理解志向動機」が強い場合、他の2つの動機が強い場合と比べて（特に女子では）成績が良いという結果が報告されており、このプログラムは国家試験対策として効果的であったと評価できる。

図2は、今年度最初の模試（4/8：図2-a）と最後の模試（2/10：図2-b）における得点分布を示したもの

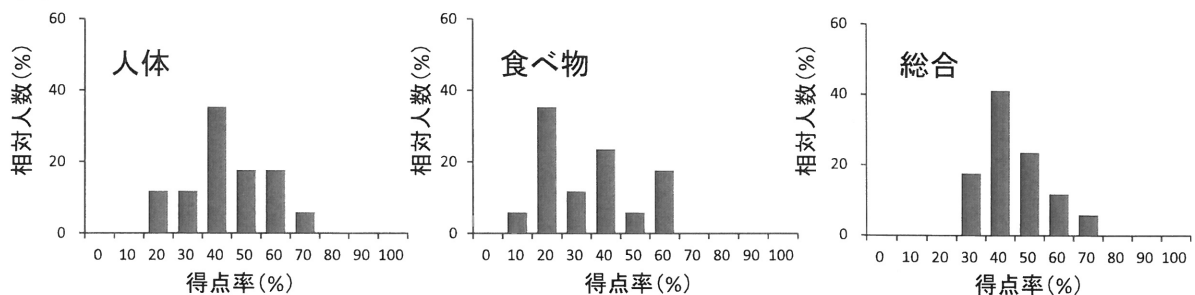
である。「人体」「食べ物」「総合得点」のいずれにおいても、最初の模試では学生間のバラツキが大きく得点も低い、最後の模試ではバラツキは小さくなり、グラフは全体的に右側にシフトして不得意科目が克服できている様子が見てとれる。

このように模試ごとの科目別得点率のヒストグラムを描いて学生の実力を検討することは、科目担当教員が自分自身の教え方について反省する材料ともなった。ヒストグラムにおいて低得点での分布が多い場合は、学習支援効果が充分でないことの現れと理解し、その都度新たな対策を考えるきっかけとなった。これを繰り返したことが、グラフ全体が高得点側にシフトするという結果に結びついたと思われる。

### （3）国家試験にむけた学習支援効果の評価

上述の通り、4月以降非常に多くの時間と労力を割いて国家試験にむけた学習支援を実施してきた。ここで、これらの学習支援がどの程度の効果をあげたのか、模試の結果を用いて検証することにする。学習支援前（4/8と5/6）と学習支援後（11/11、1/8、1/20）に関して科目別に平均得点率をもとめ、学習支援前後に差があるかt検定により評価した（表3）。その結果「応用栄養」で有意な差が認められなかったものの、その他の全ての分野で有意差が認められた（「社会」で $p < .01$ 、「人体」

#### (a) 学習支援前



#### (b) 学習支援後

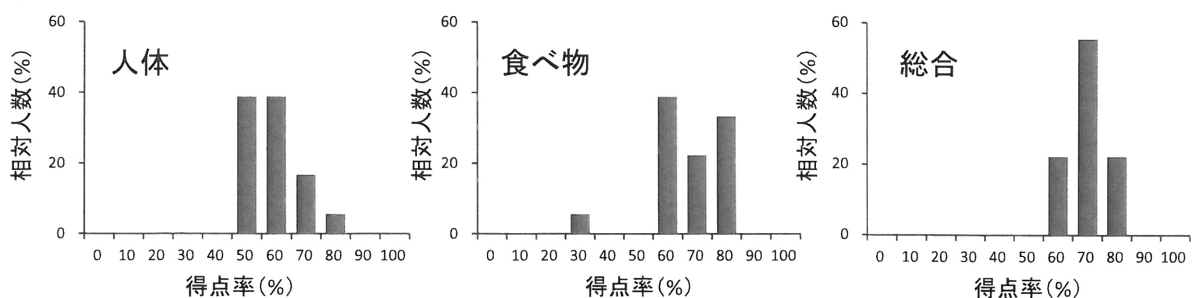


図2 学習支援前後における模試の得点分布

表3 各分野における学習支援前後の模試平均得点率の差

	学習支援前		学習支援後		t 値
	平均	SD	平均	SD	
社会	50.8	11.1	59.1	6.5	4.78**
人体	43.3	11.6	54.6	8.6	5.15***
食べ物	45.3	9.7	60.3	7.2	7.29***
基礎栄養	59.8	14.0	72.1	7.6	3.56***
応用栄養	52.6	15.4	53.7	7.5	1.56
栄養教育	58.8	11.0	70.6	7.7	4.02***
臨床栄養	52.0	11.4	60.4	7.1	3.53***
公衆栄養	45.5	10.4	58.9	6.7	6.16***
給食経営	64.5	14.0	73.1	7.2	3.74***
応用力試験	52.9	16.2	66.3	9.0	4.73***
合計	51.7	8.8	61.9	5.4	5.52***

\*\*\*  $p < .001$ , \*\*  $p < .01$ ,  $n=19$ 

「食べ物」「基礎栄養」「栄養教育」「臨床栄養」「公衆栄養」「給食経営管理」「応用力問題」で  $p < .001$ 。特に、合計得点率においても学習支援前後で差が有意であったこと ( $p < .001$ ) は重要である。

表3において模試平均得点率の標準偏差 (SD) に目を向けると、学習支援後の SD は、全分野において支援前より小さくなっていることに気づく。これは学生間の差が小さくなったことを意味する。すなわち、初めは勉強が苦痛であってもそれを継続するうちに次第に学習動機が強まり、成績アップに結び付く可能性が示唆された。

#### (4) 国家試験にむけた学習支援に対する学生の意識

国家試験を受験する学生には、学習支援への出席を義務付けている。学科では半期ごとに計画を立て、それぞれ100コマを越える学習支援を行ってきた。図3に第2学期に実施した学習支援の出席率を示す。多くの学生

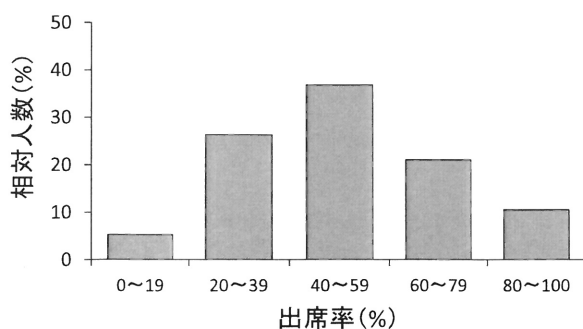


図3 学習支援の出席率

の出席率は、おおよそ半分程度 (平均値: 52.5%、中央値: 55.8%) であり、8割以上出席した学生は10.5%であった。教員は国家試験合格に向けて全力で授業の準備をしているため全ての授業を受けて欲しいと考えているのだが、欠席する学生が減らなかったことが残念でならない。12月末に回収したアンケートでは、「自分の出席率は良い方だと思う」という問いに対して、「そう思う」「大体そう思う」と回答した学生が全体の44.4%であった。教員が感じていたこととは裏腹に学生は授業に出席していると思っているようであり、教員と学生との間に温度差を感じる結果となった。「もう少し授業数が少ない方が頭の整理がしやすく、学習効果が高まると思う」という問いには、「そう思う」「大体そう思う」と回答した学生が50.0%、「どちらでもない」を含めると94.4%おり、学生のキャパシティからすると、授業数が多すぎたことがこのような結果を生んだ要因の一つかもしれない。思い返せば、授業数が多かった分、確かにインプットも多かったように思う。本学の学生のキャラクターを考えると、次々と新しい情報を与えるよりは、11月ころまでは、基本事項を何度も繰り返し学習させ、確実に記憶に残させることに重きを置くのも一つのやり方かもしれない。本来は第1学期のうちに、そこまで到達させることを目指していたのだが、第1学期には3年次までの総復習をさせる作業に思った以上の時間がかかってしまったため、なかなか難しかったのも事実である。第2学期の学習支援を本来の意味での国家試験対策としてよ

り有効に使っていくためには、3年次までに学習しておくべきことを各年次で確実に習得し、4年次まで記憶に残しておいてもらうことが重要だと考えられる。

学習支援の感想について、「授業の内容は自分にとって難しかったので、もう少し簡単にしたい」という問いに対しては、「そう思う」「大体そう思う」と回答した学生は0%であった。また「教員の教え方はわかりやすかった」に対してそう思う、大体そう思うと回答した学生は44.4%であり、「どちらでもない」を含めると94.4%であった。一方、学習支援は不要だと回答した学生は5.6%であった。学生は国家試験に向けた学習支援を必要としており、今年度実施した内容に対しての満足度は高かったことがわかった。

#### (5) 今後の管理栄養士国家試験対策にむけて

来年度の学習支援を計画する上で、現4年生の意見は参考になる。「国家試験に合格するためには、クエスチョン・バンクを使った学習をいつから始めたら良いと思いますか」という問いでは、1年次から4年次まで様々な回答があったが、3年次第2学期からと回答した学生が最も多かった。また、自由形式で後輩へのアドバイスを書かせたところ、3年次から2～3か月に1回のペースで外部模試を行い、現在の自分の理解度や実力を確認しておくという意見が寄せられた。竹嶋らの報告<sup>10)</sup>では、早期からの計画的な国家試験教育プログラムの実施は、国家試験への意識の向上や学習意欲の喚起に役立つことが示されている。本学科の学生は、3年次の12月に「一般社団法人全国栄養士養成施設協会認定栄養士実力認定試験」を受験する。この試験で最も優れた判定（A判定）を得るために3年次の4月より、試験にクリアするための実践問題演習を含む学習支援（学内模試や練習問題を多く解く）を実施しているが、その内容は国家試験向けというよりは認定試験向けで、栄養士として必要な基本的事項の理解を中心としたものである。学習する分野的には管理栄養士国家試験とほとんど差はないのだが、国家試験向けに十分な時間を割いて学習支援ができない理由は、3年次では通常授業や実習・実験やその課題が多く、試験対策に時間を割くことがなかなか難しい現状があるためである。しかし今後は、この時期から国家試験の過去問を数多く解く訓練をし、加えて、回数は少なくとも4年生とともに外部模試を受験させることによって、国家試験への意識や学習意欲がより向上するのではないかと考える。今年度は、夏の外部予備校講師による集中講義には4年生に加えて3年生も大勢参加できるように日程等調整し、国家試験への意識の向上

を期す試みを行った。このようにして、国家試験に対して高い意識を持った学生が増えれば、4年次から始まる集中的な国家試験対策に対しても意欲的に取り組んでもらえ、効率的な実力アップにつながっていくであろう。

管理栄養士国家試験の受験は、本学では今年度で3回目になる。1年目、2年目と合格率は上がっているが、今年度はさらにそれをアップさせるため、緻密に学習支援計画を立て、それを実践した。ある時点において、その時期までにクリアしなければならないレベルあるいは課題は何か、どのようにすればクリアできるかなど、昨年度までのデータと現4年生の模試の結果とを照らし合わせながら分析し、学習支援計画を微調整しながらすすめていった。さらに、合格のために必要なレベルと自分の実力にどの程度のギャップがあるのか、それを学生自身にも分かりやすくするために、そしてそのレベルを超えられるよう努力してもらうために、明確な目標値を数字で示すようにした。今年度の学生に関して言えば、直近の目標値を定めてあげることで、勉強に対する必死さが目に見えて変化していくのがわかった。そして、必死に勉強した分だけ成績を上げることに見事に成功している（苦手分野強化プログラムの項参照）。模試の総合点が上がることも当然喜ばしいことだが、勉強した科目の点数があがる体験も学生の励みになったようである。

管理栄養士国家試験対策は、食健康栄養学科教員が全員で、すなわち、教授から助手にいたるまでの全員で取り組んだ学科の第一優先課題である。教員のうち管理栄養士国家試験受験体験者は折に触れ自身の体験談を語り励まし続けた。また、模試ごとの分析を学科会で報告し、担当者打ち合わせ会で何度も対策を検討し続けた。膨大な模試、プリント準備、スケジュール調整、頻回の面談、授業以外の多くの学習支援コマの開催など、食健康栄養学科教員の全員の協力で国家試験対策を進めた。本稿は管理栄養課題研究Ⅱの担当者2名が著者となり、平成25年度の4年生対象の管理栄養士国家試験対策をまとめ検証したものであるが、実行したすべては全学科教員である。心から御礼を申し上げる。

最後に、本稿を執筆しているのは国家試験のちょうど1カ月前である。これまでに友達、家族、就職などで悩むことがあった学生もいたが、目標に向かって努力し続けたことが、管理栄養士国家試験合格というかたちで実を結ぶよう願ってやまない。

## 引用文献

- 1) 管理栄養士国家試験出題基準（ガイドライン）改定検討会報告書，厚生労働省 2010 年
- 2) 管理栄養士出題基準・出題基準の利用法 5-6，厚生労働省，2010 年
- 3) 栄養士法 第一条，平成 19 年 6 月 27 日最終改正
- 4) 東海学院大学：平成 25 年度履修の手引き
- 5) Roediger, H. L. III., & Karpicke, J. D. Test-enhanced learning : Taking memory tests improves long-term retention. *Psychological Science* 17, 249-255 2006
- 6) 石川真理子，吉田甫：易しい課題の反復学習が子どもの国語と算数問題の解決におよぼす影響，立命館人間科学研究 13 31-39 2007
- 7) 本間達，若松秀俊：医用工学教育のための Web-Learning システムの開発，臨床検査学教育 1 (2)，138-143 2009
- 8) 上藺恒太郎，糸山景大：連想調査による情意測定の試み 子どもたちが感じた学校，長崎大学教育学部教育科学研究報告，54, 27-41 1998
- 9) 速水敏彦：学習動機に関する一研究，名古屋大学教育学部紀要 教育心理学科，34 12-23 1987
- 10) 竹嶋理恵，長谷川辰男，大関健一郎，舩山朋子，近藤知子，椎名喜美子，鈴木幹夫，萩原宏毅，本間信生，山本涼一，小室元政，三上眞弘：国家試験特別教育プログラムによる作業療法学科学生の国家試験への意識および学力の変化，帝京科学大学紀要 8，37-46 2012